

朝日新聞における皇族の呼称 および待遇表現の変遷

— 甯子内親王・眞子内親王を例に —

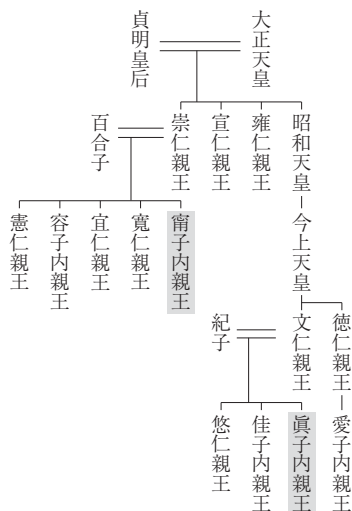
松 本 敦

[キーワード：①朝日新聞 ②敬語の使用実態 ③「ちゃん」呼称]

1. はじめに

新聞記事のなかで、天皇・皇族に対してどのように言葉づかいを用いているか。たとえば、国内の発行部数上位三紙「読売新聞」「朝日新聞」「毎日新聞」の今上天皇（在位：1989年～）に対する呼称を見ると、すべてが「天皇陛下」を使用している。しかし、今上天皇の動作や存在を表す待遇表現について、「読売新聞」は敬語を使用し、「朝日新聞」「毎日新聞」は敬語を使用していないことが目につく。敬語使用の有無は新聞各社の方針によって異なり、それが新聞社の今上天皇への叙述態度の表れといえる。

本稿では、皇室の待遇表現に敬語を使用していない新聞社の中で最も発行部数の多い「朝日新聞」を調査し、大正天皇の孫で三笠宮家の長女・甯子内親王と、今上天皇の孫で秋篠宮家の長女・眞子内親王の報道をもとに、戦前から平成時代にかけての皇族への呼称と敬意表現の有無、そしてその使用状況を分析していく。甯子内親王は戦前に生まれ、なおかつ民間へ降嫁した女性皇族であるため、時代や身分の変化が顕著な人物である。また、眞子内親王は平成時代に今上天皇の初孫として生まれ、現在も皇族の身分を離脱していない。甯子内親王と眞子内親王は共に女性皇族で、甯子内親王が昭和時代、眞子内親王が平成時代と異なる時代を皇族として生きた二人を同時に調査することで、新聞報道における皇族への言葉づかいの変遷の様相をより鮮明に浮き上がらせることができる。



【図1】皇室の系図

(筆者が作成、省略箇所あり)

皇族への敬称および敬語の使用実態を明らかにすることが、日本語の呼称および待遇表現の研究の一助となると同時に、将来的な皇室に対する言葉づかいのあり方を考えていく素材となりうることを期待する。

2. 先行研究

篠崎・中井（1998）は、ロサンゼルスで発刊された海外日本語新聞「加州毎日新聞」を調査し、1951年（昭和26年）の昭和天皇の巡幸の記事に使用される敬語の分析を行った。「加州毎日新聞」では日本国内の主要新聞や通信社からの配信されたものを記事にしているが、1947年に宮内当局と報道機関との間で合意された「普通のことばの範囲内で最上級の敬語を使う」という方針に則った敬語が使用されていることが確認された。しかし、それは記事の本文に限ったことであり、見出し語には戦前からの「宮城」「語らせ給ふ」のような語が使われていることから、海外日本語新聞の独自の見解が見られると述べている。

遠藤（2005）は、篠崎・中井（1998）では詳細に分類されなかった戦時中の天皇に対して使用される呼称・用語・動詞の類型の特徴を示した。この研究は一時代的な敬語使用の傾向をまとめた点で評価されるが、戦前から戦後への移行とともに皇室への待遇表現はどのような変化が生じたか、また現代の皇室報道の扱い方から見出せる変化の要因は何かといった通時的な研究には至っていない。

松本（2013）は通時的な敬語使用の状況を明らかにするために、明治時代から平成時代にかけての天皇に関する新聞記事から、呼称・待遇表現の用例を一年ごとに抜粋した。この研究では、平成時代の到来により、天皇に対して敬語が使用されなくなったのが1994年（平成6年）であることの発見、さらに明治～昭和前期までもっぱら使用された「-あそばさる」「-あらせらる」といった古語特有の表現が戦後一切使用されなくなり、「御になる」よりも接辞が少ない「-れる」へと形式が変遷していく過程を明らかにした。ただし、これは天皇に限った調査であり、宮家の皇族にも焦点を当てて比較する必要がある。

3. 研究方法

朝日新聞社が提供するデータベース「^{きくぞう}聞蔵Ⅱビジュアル」を使用し、2013年3月時点で甯子内親王および眞子内親王について報じた記事をすべて抜粋する。検索にあたり、「甯」がデータベース上の文字として表示されずに戦前はカタカナ（「ネイ」）、戦後はひらがな（「やす」）になるため、甯子内親王の生まれた宮家である三笠宮家から「三笠宮」と「やす子」「ネイ子」「内親王」をAND検索し、さらに降嫁先である近衛家から「近衛」と「やす子」をAND検索してそのなかから該当する記事を選んだ。その際、甯子内親王の動向を直接報じた記事のみに限定し、コラムの一部に名前が出されているもの

などの間接的な記事は除外する。眞子内親王もまた、「秋篠宮」と「眞子」「内親王」をAND検索し、眞子内親王の動向を直接報じた記事に限定した。

選別した記事から、甞子内親王および眞子内親王への呼称・待遇表現をすべて抜き出す。くわえて、甞子内親王および眞子内親王の待遇表現に敬意が含まれているかも精査し、有無で語を分類することとする。

4. 甞子内親王の報道

前述の方法で記事を選別した結果は、以下の表1にまとめる。

【表1】記事一覧

	年月日	記事タイトル
1	1944年4月27日	内親王さま御誕生 三笠宮家の御慶び
2	1944年5月3日	「甞子」と御命名 三笠宮内親王殿下
3	1944年6月24日	三笠宮甞子内親王殿下 きのふ三殿に初の御参拝
4	1965年7月28日	三笠宮甞子さまご婚約 日赤社員、近衛忠輝氏と
5	1965年8月20日	上野の山はエジプト色 甞子さま開場にハサミ
6	1965年8月31日	「結納は10-11月」 甞子さんのご結婚 三笠宮さまが語る
7	1966年2月22日	来月7日に納采の儀 三笠宮甞子さまと近衛忠輝氏
8	1966年3月7日	めでたく納采の儀 甞子さま「お受けします」
9	1966年4月16日	12月18日ご結婚式内定 三笠宮甞子さまと近衛忠輝氏
10	1966年10月28日	三笠宮甞子さん退院
11	1966年11月25日	1日に「告期の儀」三笠宮甞子さんご結婚
12	1966年12月1日	甞子さん 告期の儀
13	1966年12月8日	二千七百万円の時金 三笠宮甞子さんに
14	1966年12月13日	陛下からはなむけのことば 甞子さん「朝見の儀」
15	1966年12月19日	三笠宮甞子さんが挙式 あたたかい家庭を 伸むつまじく記者会見
16	1988年1月6日	「あそび展」ご覧に
17	1988年10月5日	天皇陛下、めいの甞子さんともお話
18	1997年4月4日	選手村名誉村長に近衛甞子さん有方 長野冬季五輪組織委が要請
19	2006年2月10日	書の至宝展、三笠宮妃百合子さまら鑑賞

甯子内親王自身が初めて報じられたのは、1944年（昭和19年）4月27日である。誕生はこの前日の26日であるが、「午前十時五十八分御分娩」であったために朝刊には間に合わず、また1944年3月6日～1949年12月1日の期間に夕刊が休止されていたことから、翌日の報道になったと考えられる。誕生年に1～3の報道があったのを最後に、その後21年間は甯子内親王に関する報道がされていない。ようやく甯子内親王の婚約が報じられ、挙式までの動向が4～15の記事に表れている。そして降嫁して「近衛甯子」となった後の動向が16～19の記事に見られ、現在に至っている。

1944年4月～2013年3月の69年間のうち、甯子内親王を直接報じた記事が19例というのは、皇族の報道としては非常に少ない。三笠宮家の五人のきょうだい^{きょうだい}を報じた記事数で比較してみると、甯子内親王と同じ基準で記事を選別した結果、長男・寛仁親王が181例、次男・宣仁親王^{よしひと}が44例、次女・容子内親王^{まさこ}が13例、三男・憲仁親王^{のりひと}が60例であった（2013年3月時点）。このことから、男性皇族に比べて女性皇族の報道が明らかに少ないことがわかる。それは、女性皇族が降嫁すると民間人になり、皇族としての公務が報じられる機会が実質的に減るのが大きな要因であろう。

4.1 甯子内親王の呼称

19例の各記事から、甯子内親王に対する呼称を抽出する。表2では、本文に登場した順序で列挙し、重複している場合には括弧内の数字でその回数を示す。呼称の抽出する際に見出しと本文とで分け、呼称の特徴を見出ししていく。

【表2】見出し・本文の呼称一覧

	見出しの呼称	本文の呼称
1	内親王さま	内親王殿下(2)
2	三笠宮内親王殿下	内親王殿下、甯子内親王殿下
3	三笠宮甯子内親王殿下	甯子内親王殿下(2)、内親王殿下
4	三笠宮甯子さま	甯子さま(2)
5	甯子さま	三笠宮甯子さま(2)、甯子さま(4)
6	甯子さん	甯子さま(2)
7	三笠宮甯子さま	三笠宮甯子さま、甯子さま(2)
8	甯子さま	三笠宮甯子さま、甯子さま(4)
9	三笠宮甯子さま	三笠宮甯子さま、甯子さま
10	三笠宮甯子さん	三笠宮甯子さん
11	三笠宮甯子さん	三笠宮甯子さん、甯子さん
12	甯子さん	三笠宮甯子さん、甯子さん(2)

13	三笠宮甯子さん	三笠宮甯子さん、甯子さん
14	甯子さん	三笠宮甯子さん、甯子さん(3)
15	三笠宮甯子さん	甯子さん(4)
16		近衛甯子さん
17	甯子さん	近衛甯子さん、甯子さん
18	近衛甯子さん	近衛甯子さん、近衛さん(3)
19		近衛甯子さん

表2を大別すると、戦前の1～3の記事に「殿下」、戦後の4～19の記事に「さま・さん」が使用されている。

天皇・皇族への呼称は、皇室典範（昭和二十二年一月十六日法律第三号）において定められている。まず甯子内親王の「内親王」は、第二章第六条の「嫡出の皇子及び嫡男系嫡出の皇孫は、男を親王、女を内親王とし、三世以下の嫡男系嫡出の子孫は、男を王、女を女王とする。」に拠っている。甯子内親王は大正天皇の皇孫かつ女性皇族であるから、内親王の身位を与えられている。しかし、内親王は敬称ではない。皇族への敬称は、第四章第二十三条に「天皇、皇后、太皇太后及び皇太后の敬称は、陛下とする。前項の皇族以外の皇族の敬称は、殿下とする。」とあり、内親王は天皇および三后に含まれないため、「殿下」の敬称を用いることになる。つまり、皇室典範に則るならば「甯子内親王殿下」と呼称するのが正しい。

そうなると、戦前の1～3の記事の呼称は皇室典範に依拠したものであり、戦後になって新聞社がその方針を転換したことになる。なお、1の記事の見出しに「内親王さま」と「さま」が用いられているのは、まだこの時点で「甯子」と名付けられておらず、「〇〇内親王殿下」という固定化された呼称が完成していないからだと考えられる。本文に「殿下」が使用されているのは、おそらく宮内庁の発表を引用したからであろう。では、戦後の4～19の記事ではどうか。4の記事以降は、甯子内親王の敬称に「殿下」が一切使用されなくなっている。なかでも、10以降は「さま」ではなく「さん」のみが使用されている点に注目したい。6の記事の見出しにも「甯子さん」が用いられているが、これはこの記事の大半が父親の三笠宮崇仁親王へのインタビューで占められており、インタビューのなかでの「甯子」と娘を呼び捨てたことも相まって、国民に親しみやすい「甯子さん」が選ばれた可能性がある。もしくは婚約の話題であるため、降嫁後に民間人になることを意識して「さん」を使用したかもしれない。どちらにせよ、6の記事の見出しは例外とし、10の記事以降に「さま」から「さん」へと完全に移行したとみるべきであろう。

次に表3では、表2の呼称を「内親王」型、「さま」型、「さん」型に分け、使用状況

の変遷をみる。「内親王」型には「内親王殿下」を、「さま」型には「内親王さま」「甯子さま」を、「さん」型には「甯子さん」「近衛甯子さん」「近衛さん」を含めることとする。

【表3】呼称の分類

	見出しの呼称			本文の呼称		
	「殿下」型	「さま」型	「さん」型	「殿下」型	「さま」型	「さん」型
1		1		2		
2	1			2		
3	1			3		
4		1			2	
5		1			6	
6			1		2	
7		1			3	
8		1			5	
9		1			2	
10			1			1
11			1			2
12			1			3
13			1			2
14			1			4
15			1			4
16						1
17			1			2
18			1			4
19						1

こうしてみると、1～3の「内親王」型、4～9の「さま」型、10～19の「さん」型傾向がはっきりと表れている。本文は、この分類が時期ごとに明確に推移しているが、見出しは、1の「内親王さま」と6の「甯子さん」の2例が分類の不一致を生じさせている。

このことから、見出しは本文よりも呼称の厳密度が低く、読者の目を引くためにあえて本文との呼称の差を生み出すことがあるという特徴を見出せる。

4.2 甯子内親王の待遇表現

次に、各記事から甯子内親王に対する待遇表現を抽出する。まず敬意の有無で大別し、さらに見出しと本文に分ける。表2と同様に、重複する場合は括弧にその数を示し、また甯子内親王に対して周りの人々が働きかけることば（本来、謙譲表現を用いることば）には網掛けを施す。動詞は、補助動詞が接続しているものは一語とみなし、活用やテンスの変化が生じているものは終止形・非過去形で表すこととする。

【表4】待遇表現一覧

	敬意あり		敬意なし	
	見出し	本文	見出し	本文
1	御生誕、御慶び	御誕生あらせられる(2)、御母子、御健やかに、わたらせ給ふ、 <u>承る</u> 、畏くも、わたらせられる、御姪、あたらせられる、称せられる		
2	御命名	御誕生あらせられる、御命名式、御七夜、御目出度く、執り行はせられる		
3	御参拝	御誕生あらせられる、御目出度く、行はせられる、御揃ひ、御参内あらせられる、御祭儀、 <u>抱き参らす</u> 、御参進(2)、御拝礼あらせられる(2)、御同様、御儀、終へさせられる、御対顔あらせられる(2)、御伺候、御殿、御帰還遊ばされる		
4	ご婚約	ご婚約、ごいっしょに、(報告を)される、行かれる、報告される、ご誕生、ひかれる、広められる		婚約(2)、結婚、卒業、参拝、外遊、語る、二人、見合わせる、ほほえみ合う
5		切られる、ご婚約、のぞき込まれる、気にされる、(横顔に)なられる、見くらべられる、つぶやかれる、ささやかれる		ぬぐう
6	ご結婚	お会いになる、ご婚約、ご訪問、お心構え、語られる		
7		ご婚約中、 <u>おたずねする</u>		答える
8		ご婚約、立たれる、お三人、答えられる、お二人、回られる		<u>渡す</u> 、婚約
9	ご結婚式	婚約される、ご結婚後、通学される		卒業
10		入院される、もどられる、(よく)なられる	退院	切る、退院、自宅、続ける
11	ご結婚	結婚される、報告される、ご参拝		
12				告げる、答える

13		結婚される		
14		参拝される(2)、着替えられる		姿、つける
15				二人、報告する、迎える、出す、すませる、向う、帰国後、住む、通学、語る
16	ご覧	おみえになる、鑑賞される、お二人		
17				話す
18			要請	結婚、活動してもらう
19			鑑賞	

見出しの待遇表現では、10の記事で初めて敬意なしの「退院」が使用されている。それ以前の1～9は、皇族への呼称に「殿下」「さま」の敬称が用いられるのが基本であると同様に、敬意をこめた待遇表現がみられる。では、「殿下」「さま」の敬称ではなく「さん」が用いられるようになった10以降について、待遇表現で11に「ご結婚」、16に「ご覧」といった敬意ありの表現がみられるのはなぜか。11で考えられるのは、「告期の儀」は天皇・皇后を前にする宮中での厳かな儀式であり、その告知をする記事であったことで自然と文体が丁寧になってしまったということである。それは、本文中の待遇表現に一切敬意なしが表れていないことから推測できる。呼称では完全になされた敬意の有無の移行も、待遇表現ではそれほど厳密になされていないようである。もう一つの16の記事について、一見すると敬意ありへの回帰であるかのように思えるが、これは「ご覧」の動作主が甯子内親王だけでなく、母親の三笠宮妃百合子も加わっていることによるものである。このときに甯子内親王は降嫁して民間人となっていたが、皇族である三笠宮妃に同行したために、二人の行った動作に対してこれまでのように敬意なしの待遇表現を使用することが憚られたのであろう。

本文の待遇表現は、前述の16の例を除けば、1～14に敬意あり、4～19に敬意なしが使用されているとみなせる。まずは敬意ありの語を、①名詞、②動詞、③連用修飾語の三つに分類し、さらに②動詞を「Ⅰ.古語特有の尊敬語」、「Ⅱ.れる・られる」、「Ⅲ.おになる」「Ⅳ.謙譲語」に区分する。②Ⅰには「-あらせられる」「-遊ばされる」「-せられる」「-給ふ」を、③には動詞を除く用言（形容詞・形容動詞）の連用形と副詞を含める。

①名詞

御母子、御姪、御命名式、御七夜、御揃ひ、御祭儀、御参進、御同様、御儀、御伺候、御殿、ご婚約、ご誕生、ご婚約、ご訪問、お心構え、ご婚約中、お三人、お二人、ご結婚後、ご参拝

②動詞

I. 古語特有の尊敬語

御誕生あらせられる、わたらせ給ふ、わたらせられる、あたらせられる、執り行はせられる、行はせられる、御参内あらせられる、御拝礼あらせられる、終へさせられる、御対顔あらせられる、御帰還遊ばされる

II. れる・られる

称せられる、される、行かれる、報告される、ひかれる、広められる、切られる、のぞき込まれる、気にされる、見くらべられる、つぶやかれる、ささやかれる、語られる、立たれる、答えられる、回られる、婚約される、通学される、入院される、もどられる、なられる、結婚される、報告される、参拝される、着替えられる、鑑賞される

III. お-になる

お会いになる、おみえになる

IV. 謙譲語

承る、抱き参らす、おたずねする

③連用修飾語

畏くも、御健やかに、御目出度く、ごいっしょに

② I・IIはともに本動詞に後続する敬意表現であるが、Iは近代では皇室にしか使用されない待遇表現であるため、IIとは区別している。しかし、1の「称せられる」は、サ行変格活用動詞「称す」に尊敬の助動詞「られる」が接続しただけであるので、戦前の待遇表現のなかでは唯一IIに分類している。本来なら「称させられる」とするのがよいが、おそらく「称せられる」には最高敬語の定型である「-せられる」(助動詞の「せる」+「られる」)の音が含まれており、「られる」単独でも礼を欠く語感ではなかったのではないかと推測する。

戦後の報道では、甯子内親王の動作に対してII・IIIの表現が使用されているが、IIの「れる・られる」型が圧倒的に多い。これは、IIIが接頭辞「御(お・ご)」と接尾辞「になる」の二つの接辞(もしくは接周辞「御-になる」)を要するものであるのに対し、IIは助動詞「れる・られる」を語に後続させるのみであるので、より使用しやすく、丁寧度も相対的に低くなる。たとえば、戦後の記事では甯子内親王にもっぱら「れる・られる」を使用していたのが、16で三笠宮妃に同行した際は「お-になる」が使用されており、意図的に使い分けが行われていることが窺える。また、6の「お会いになる」が使用された記事の本文も見てみると、「三笠宮ご夫妻と長女甯子さまは…(略)…宮内記者会とお会いになり、」と主語に両親の「三笠宮ご夫妻」が加わっていた。16と同様に、今

の連用形として表れていた。このことから、15以降に甞子内親王に単独で使用している尊敬表現はみられないが、それ以前の動詞に敬意なしがみられても、それがすべて甞子内親王への待遇表現の低下を意味しているのではないといえる。

5. 眞子内親王の報道の変遷

平成に改元してまもなくの1991年（平成3年）10月23日、秋篠宮家の長女として眞子内親王が誕生した。甞子内親王の誕生から約47年後経ち、新聞報道はどう変化しているか。眞子内親王誕生の翌日の新聞記事には、次のようにある。

【1991年10月23日】秋篠宮家に女兒誕生 身長50センチ、体重3238グラム

秋篠宮妃紀子さま（25）は23日午後11時41分、皇居内の宮内庁病院で女兒を出産された。天皇ご夫妻にとっては初孫で、23人目の皇族となる。女子皇族は昨年9月の高円宮家の3女絢子さま以来で、16人目。一般のお七夜にあたる「命名の儀」で、名前とお印（しるし）が決まる。…（略）…

お子さまには24日、陛下から守り刀と袴（はかま）が贈られる。名前は秋篠宮さまがつけ、出産から50日目以降に皇居内の宮中三殿に参拝される。

このように、見出しの「誕生」に接頭辞「御-」が使用されていないものの、二重線部「参拝された」に敬意が含まれていることがわかる。甞子内親王と比較すると敬語が簡素化されてはいるが、幼少の皇族にも敬語を使用したことが認められる。

次に眞子内親王を報じた記事を見ると、眞子内親王に対する呼称の不安定さが窺える。

【1991年11月1日】紀子さまと眞子さま、そろって元気に退院 秋篠宮さまが付き添い

秋篠宮妃紀子さまと長女の眞子（まこ）さまの母子が1日午前10時過ぎ、先月23日の出産以来入院していた皇居内の宮内庁病院を、秋篠宮さまに付き添われてそろって退院された。病院関係者らが見送った。宮内庁によると、経過は順調で母子ともに健康という。

お2人は、内親王を「眞子ちゃん」と呼んでかわいがっているという。1日朝の退院直前の計測では、身長が50センチで出産時と変わらず、体重は3,074グラムと一時的に減った。

入院中、秋篠宮さまは1日に一度は病院を訪れ、食事を一緒にするなど、紀子さまの回復と内親王の様子を見守って来た。病室内で「眞子ちゃん」を交代で抱き上げ、記念写真を夫妻で撮り合ったりした。…（略）…

「眞子」と名付けられた眞子内親王に、初めて「さま」の敬称が使用された例である。しかし、幼少の皇族に「さま」を使用することに抵抗があったとみられ、秋篠宮夫妻の眞子内親王に対する呼称「『眞子ちゃん』」を括弧をつけて以降の呼称に採用している。こうすることで、皇族に「さま」の敬称をつけていながらも、幼少の皇族へ敬称を用いることの違和感を解消しようとする意図があったのであろう。

さらに次の記事を見ると、このようにある。

【1991年12月20日】眞子内親王が三殿に初参拝

10月に誕生された秋篠宮家の長女、眞子（まこ）内親王の皇居・宮中三殿への初参拝が20日午前、行われた。…（略）…

二重線部「誕生された」が眞子内親王への敬意を表しており、眞子内親王への呼称も「さま」ではなく身位に当たる「内親王」を使用している。皇室典範において内親王に対する敬称は「殿下」であるが、おそらく内親王を「社長」「部長」のような役職・身分と考えたためにこのような呼称となっていると考えられる。

ところが、翌年の夏の報道はその呼称はまた変化する。

【1992年8月8日】秋篠宮家の「眞子ちゃん」、9カ月です 軽井沢でお目見え

秋篠宮家の長女「眞子ちゃん」が7日、ご一家の静養先の長野県・軽井沢で、両親に抱かれて誕生直後以来2度目のお目見えをした。10月23日が誕生日で、いまは9カ月が過ぎたところ。宮内庁によると、最近足がしっかりしてきてつたい歩きをするようになったという。

水色のベビー服を着た眞子ちゃんは、指をしゃぶりながら秋篠宮さまのテニスを見た。

眞子内親王の呼称（波線部）がすべて「眞子ちゃん」と変えられたことに加え、眞子内親王の動作（二重線部）に対する敬語表現が一切使用されていないことに気づく。皇族に対して、朝日新聞が敬称も敬語も一切使用しないのはこれが初めての例である。1991年11月1日は「さま」を使用した上で両親の呼称を引用した形で「ちゃん」を使用したのに比べ、当記事では括弧がつけられていない形で、より直接的な表現となっている。

これ以来、朝日新聞では皇族に敬語を使用しなくなったが、「眞子ちゃん」呼称が定着したとは言い難い。表5では、1992年8月8日以降の眞子内親王を報じた記事において、眞子内親王の呼称の種類をまとめる。

【表5】 眞子内親王の呼称一覧（1992年8月8日～）

	年月日	記事タイトル	呼称
1	1992年8月8日	秋篠宮家の「眞子ちゃん」、9カ月です 軽井沢でお目見え	眞子ちゃん
2	1992年11月30日	秋篠宮さま27歳に	眞子ちゃん
3	1993年11月30日	秋篠宮さま、28歳の誕生日	眞子ちゃん
4	1994年5月11日	紀子さま懐妊を発表	眞子ちゃん
5	1994年12月29日	秋篠宮妃紀子さまが出産のため入院	眞子ちゃん
6	1994年12月30日	紀子さま、女の子出産 母子ともに健康 秋篠宮家の第2子	眞子ちゃん
7	1995年1月4日	佳子ちゃん「佳い子に育って」と願い込め 秋篠宮ご夫妻の次女命名	眞子ちゃん
8	1995年1月6日	秋篠宮妃紀子さま、 佳子ちゃんにつこり退院 宮内庁病院	眞子ちゃん
9	1995年11月30日	秋篠宮殿下が30歳の誕生日迎え会見 阪神大震災やサリン事件語る	眞子さま
10	1996年4月11日	秋篠宮ご夫妻の長女、 眞子ちゃんが学習院幼稚園に入園	眞子ちゃん
11	1997年8月26日	天皇ご一家下田に 秋篠宮さま・紀宮さまも /静岡	眞子さま
12	1998年3月16日	秋篠宮家の長女、 眞子ちゃんが学習院幼稚園を卒園	眞子ちゃん
13	1998年4月10日	秋篠宮家の長女眞子ちゃん、小学生に	眞子ちゃん
14	1998年8月27日	天皇后両陛下が須崎御用邸でご静養 31日まで /静岡	眞子さま
15	1998年11月30日	秋篠宮さま、33歳に	眞子さま
16	1999年4月12日	佳子ちゃんが学習院幼稚園に入園	眞子ちゃん
17	1999年8月25日	天皇后両陛下が須崎御用邸で静養 下田 /静岡	眞子ちゃん
18	1999年8月27日	皇太子ご夫妻と秋篠宮ご一家が 御用邸に到着 下田 /静岡	眞子ちゃん
19	1999年8月30日	皇太子ご夫妻、伊豆から帰京 下田 /静岡	眞子ちゃん
20	1999年12月14日	懐妊の可能性認める 皇太子妃雅子さま更に検査 宮内庁	眞子さま

1～19にかけての記事で「眞子ちゃん」の使用例が見られ、9・11・14・15の記事には

依然として「眞子さま」が使用されている。

「眞子さま」が使用された4例の記事は、今上天皇と秋篠宮文仁親王が主体となるものである。つまり、1992年8月8日以降は原則として「眞子ちゃん」呼称を使用するが、天皇や成人皇族が主体となる場合は畏まった「さま」呼称が好んで使用されるということである。ただし、17～19の記事は天皇や皇太子夫妻が主体であっても「ちゃん」呼称が使用されており、眞子内親王の呼称にゆれがあることに変わりはない。

20の記事以降は、眞子内親王の呼称は「さま」で統一され、現在に至っている。1990年代は皇室への敬語使用の方針の過渡期と言え、この過程を通して、「幼少の皇族にも『さま』呼称」「皇族の動作・存在に関する待遇表現に敬意を含めない」という朝日新聞の態度が確立したのである。

6. まとめ

朝日新聞において、甯子内親王および眞子内親王を報じるすべての記事から呼称・待遇表現に関する語を抽出した結果を以下にまとめる。

[甯子内親王]

- (1) 戦前の甯子内親王の報道では、皇室典範に基づいた敬称「殿下」が使用されたが、戦後は「さま」「さん」へと変更された。「さま」から「さん」への移行は、1966年4月16日と10月28日の間に行われている。ただし、戦前であっても見出しにおいてはまだ名付けられていない皇族であることや先例によって「さま」も許容されており、戦後も話題によっては「さま」が「さん」に置き換わる事例もみられる。
- (2) 見出しの待遇表現では、呼称が「さま」から「さん」へ移行した時期と同様に、1966年4月16日以前は敬意あり、10月28日以降は敬意なしの語が使用されている。10月28日以降も敬意ありの語が使用された例もあったが、そこには両親の「三笠宮ご夫妻」の存在が意識されており、それにとまってより丁寧な待遇表現が選ばれたにすぎない。
- (3) 本文の待遇表現を①名詞、②動詞、③修飾語の三つに分類し、さらに②動詞を「Ⅰ. 古語特有の尊敬語」、「Ⅱ. れる・られる」、「Ⅲ. お-になる」、「Ⅳ. 謙譲語」に区分した。戦前にみられた「-あらせられる」「-遊ばされる」「-せられる」「-給ふ」は戦後一切使用されなくなり、「れる・られる」「お-になる」の形式に置き換わっている。「お-になる」は二つの接辞を要するが、助動詞「れる・られる」は動詞に後続するのみであるので、「れる・られる」のほうがより多く使用され、丁寧度も低い。
- (4) 1966年12月19日以降は、本文に敬意なしの語がもっぱら使用されることになる。

しかしそれ以前にみられる敬意なしの語も、文中で読点の前に連用形で表れて文末に敬意ありの語を使用した場合、許容されうる例が多くみられる。

[眞子内親王]

- (1) 「内親王」呼称は生後まもなくのみであり、1992年8月8日を境に幼少の皇族には「ちゃん」呼称を用いる方針へ転じた。しかしそれは定着せず、1999年12月14日から現在に至るまで「さま」呼称が使用されている。
- (2) 待遇表現は、「ちゃん」呼称が開始されてから現在に至るまで一貫して敬意を含まない表現が使用されている。

今回の調査では、朝日新聞の一社に限定していたため、今後は多くの用例を集める必要がある。他の新聞社の記事との比較を進めることで、通時的だけでなく、共時的な研究へと発展させていきたい。

引用文出典

聞蔵Ⅱビジュアル <http://database.asahi.com/library2/> (2013/12/01 閲覧)

参考文献

- 遠藤織枝 (2005) 「戦時中の敬語—家庭雑誌『家の光』のグラビアから—」 文教大学文学部紀要 20-1 号
- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』 大修館書店
- 北原保雄監修 (2003) 『日本語使い方考え方辞典』 岩波書店
- 国語問題協議会編輯 (2009) 『皇室敬語』 横濱五十番館
- 篠崎晃一・中井精一 (1998) 「北米邦字新聞の敬語使用—「加州毎日新聞」の皇室敬語—」
- 新プロ「日本語」総括班『研究論文集 1』 文部省科学研究費補助金 (創成的基礎研究)
- 新プログラム「国際社会における日本語についての総合的研究」(国立国語研究所)
- <http://www.ninjal.ac.jp/archives/jalic/group5/mokuji.html>
- <http://www.ninjal.ac.jp/archives/jalic/group5/98.8.html>
- 竹田恒泰 (2011) 『語られなかった皇族たちの真実：若き末裔が初めて明かす「皇室が2000年続いた理由」』 小学館
- 田中章夫 (1972) 『「オ」のつくことば・「ゴ」のつくことば』 『現代の敬語とマナー』 至文堂
- 高橋紘 (1987) 『象徴天皇』 岩波新書

中奥宏（1994）『皇室報道と「敬語」』三一書房

平田久編（1904）『宮中儀式略』民友社

松本敦（2013）「朝日新聞における皇室への敬語使用の変遷」『学習院大学大学院日本語日本文学』第9号

三笠宮寛仁（1977）『皇族のひとりごと』二見書房

山田孝雄（1924）『敬語法の研究』東京寶文館

（まつもと・あつし 博士前期課程）